

小説の要約（400字詰め原稿用紙換算枚数）

真夜中のラーメン屋台（115枚）

大学院で淡水魚の生態について研究する私は、論文が書けずに焦りを感じていた。研究室では同期の大学院生に後れを取り、後輩にも蔑まれていたが、真夜中に大学の裏門にやってくるラーメン屋台が唯一の安らぎの場所だった。そこで知り合った農学部の大学院生の矢倉と、音楽やラーメンについて語らうことによって、私は研究への意欲を取り戻していった。しかし、研究室には海外から優秀な大学院生が加入し、やがて行われた助手人事では、自分よりも若い研究者が教官として採用された。私は劣等感と不安の中で、塾でアルバイトをしたり英会話学校に行ったりして気を紛らわせていた。やがて、ラーメン屋台で矢倉と再会すると、彼もまた進路について悩んでいたことを知る。研究者になるだけが生きる道ではないと悟った私は、論文を完成させるめどをつけ、また同じ塾で国語教師をしていた後輩の真美子を好きになり、大学を離れる道を選んだ。

ボン菓子売る娘（97枚）

野鳥観察会で出会った菜月と、各地を放浪しながらボン菓子屋を始めることにした私は、日々の忙しさの中で些細なことから彼女と喧嘩別れをし、一人で営業することになった。東海道に沿った小さな町でボン菓子を膨らませて売っていた私は、あるとき店の前で食べ物をせがむ、結奈という名前の汚らしい娘に出会う。義理の父親によるDVによって家を飛び出した結奈は、山の中で暮らしていた。あまりに哀れに思った私は、結奈に店を手伝わせることにした。私も結奈も、この町では異端であったが、結奈の幼馴染の俊也があらわれたこともあり、この町に馴染んでいった。結奈は親に面会し、自立のための手続きを始めたが、私はボン菓子がこの町で飽きられてきたことをわかっていた。結奈と俊也を残して次の町に旅立つ私は、近いうちに菜月に会いに行く決意をした。

子供嫌いの家庭教師（108枚）

子供の頃にいじめにあった私は、小さな子供を見ると恐怖を感じるようになっていた。そのため小学校の登下校時には町に出ず、歩いていて子供がやって来ると、行くつもりのない方向に曲がることもあった。そんな私でも、生活のために家庭教師をしており、由紀という名前の高校生を教えていた。また、ひよんなことから、由紀の弟が所属するサッカークラブのコーチをすることになった。そのクラブのマネージャーである理恵を好きになったからである。ある夏、私は父の命令にしたがって実家に帰ったのだが、親戚の子供や、子供の頃にいじめられた不良に出会うことになり、惨憺たる気持ちになって故郷の町を出た。気分

を直すために静かなそば店で食事をしていると、光一という名前の子供を連れた親子がやってきた。光一は学校でいじめられており、一人でサッカーをすることだけが楽しみだという。私は光一をサッカークラブに入れて馴染ませるようにした。また由紀が抱く学校についての疑問にも親切に答えてやった。しかし、自分の将来について不安を感じた私は、理恵との付き合いもサッカークラブも嫌になって辞めたいと由紀に告白する。それに対して由紀は、人と付き合うことによって子供嫌いを克服し、視野を広くして生きることが重要だと、私に教えてくれた。

サクラソウを守る川漁師 (480 枚)

川漁師の繁雄は、貧しいながらも母の世話をしながらアユのオトリ屋を営業していたが、隣町でレジャーランドをつくる事業が計画されていることを知った。その計画地には、サクラソウの生息地や良い漁場があるのだが、事業によってすべて破壊される恐れが生じた。レジャーランドの建設を推進していたのは、町やゼネコンのほか、飯井土建の村中と山洪商会の直哉だった。繁雄は孤立無援の中で高校教師の堀場と知り合い、村中の娘で旅館の女将を務める萌美、幼馴染で直哉の嫁である道代、それにこのあたりを放浪していた元研究者の彦じいと、自然保護の NPO を立ち上げる。繁雄たちの活動によってレジャーランドを阻止することはできなかったが、居酒屋や旅館を大きくしながら、多くの仲間を増やしていく。地道な活動を続けるうちに敵は消え、繁雄を中心とした「川の城」は強固なものに成長していった。

新しい学習プログラム (123 枚)

水産研究所の技官であった私は、漁協の組合長の娘と結婚したものの、そりが合わずに離婚した。人員削減によって仕事は増えるばかりであり、研究員に蔑まれる日々に嫌気がさした私は、人事交流によって県の自然学習センターへの転属を希望した。センターの同僚は、いずれも他の部署で問題を起こした者たちだった。仕事をせずに山にばかり出かける永田、事務員ともめてばかりいる富永、酒とゲームに溺れる垣内、そして何もしようとしない三島。私は魚を捕ったり観察したりする新しいプログラムを提案し、訪れる参加者たちには好評であったが、同僚たちとの人間関係はぎすぎすしたものだった。やがてセンターは、利益が出ないという理由で廃止の危機に陥る。そこでようやく職員たちは団結し、センターにも光が見えてきたが……。

青山村のフクジュソウ (500 枚)

滝行で知られた竜神滝と鹿獄寺のほかに観光地のない青山村は、高齢化で寂れつつあった。高校の生物教師であり淡水魚を愛好する浩司は、勤務する高校が近くになったことによ

り、家族とともに青山村の実家に帰ってきた。同じころ、小学校の教師を辞めて、夫と娘から離れて住みたいと考えた小百合は、青山村で喫茶店を始めることになった。英会話学校の教師を務めるベトナム系オーストラリア人のグエンも、街中での人間関係に嫌気がさして、青山村の古民家に移住した。三人にはそれぞれ異なる悩みがあり、それを解決するために移住したのだが、村では古い慣習とヒエラルキーが渦巻き、自然が豊かな田舎生活を楽しむことはできない。やがて、三人にはさらなる難題が襲い掛かるが、村では自治会や鹿獄寺にかかわりなく、好きなように生きる高齢の千恵と晋作がおり、鹿獄寺を継ぐことを拒否して村を出た天男も戻ってくる。移住者と村人が複雑に絡み合いながら織りなす人間模様とその進展を楽しんでいただきたい。

河川敷での復讐（120 枚）

中学生の田川勇太は学校で男子生徒にいじめられ、女子生徒には蔑まれていた。勇太をいじめるボスは麻山寛という名前の優等生であり、その手下の進藤や今出は力が強かった。勇太にとって唯一の楽しみは放課後に河川敷の隠れ家で過ごすことであり、そこで魚を捕まえたり、体を鍛えたりしていた。勇太の父は鉄工所で働いていたが、母の死後、別の家庭をつくっていた。あるとき勇太は河川敷に見知らぬ女がいることに気が付いた。その女は高校生であり、義理の姉であることがわかる。さらに勇太は、勇太と同じように高校でいじめられ、河川敷にやってきた山沢と知り合うようになった。冬になって勇太たちはかまくらをつくるが、次々に麻山たちに壊されてしまう。麻山に復讐することを思いついた勇太は雪が舞う河川敷に麻山をおびき寄せ、穴に落とすことに成功する。穴に落ちた麻山を押し倒して叩くと麻山は泣きじゃくった。その後、勇太へのいじめはほとんど行われなくなり、やがて勇太はクラスで蔑まれていた漁師の娘である広瀬早智子と仲良くなる。勇太は早智子と結婚し、漁師としての道を歩むようになる。

コオロギに励まされ（105 枚）

大学の准教授である私は、離婚してマンションで一人暮らしをしている。教授によるパワハラに悩まされ胃潰瘍になってから、大学にはほとんど行っていない。元嫁は子供の養育費の値上げを迫ってくる。憂鬱な毎日を送っていた夏の終わりに、一匹のコオロギが部屋に侵入し、激しく鳴くようになった。コオロギをうるさいと思っていた私であったが、しだいにその鳴き声を心地よいと感じるようになり、コオロギにコロという名前をつけた。ほかにコオロギがないのに鳴き続けるコロを哀れに思った私は、秋が深まるころ、コロの鳴き声を収録した録音機を虫かごに入れて草原に置いてみた。やがて奇跡的に捕れたメスのコオロギを、コロのいる冷蔵庫の下に放したところ、コロが求愛する声が聴こえた。精力的に活動したコロに励まされた私は、論文を書く気力を取り戻し、養育費の値上げに応じて元嫁と子との関係を修復し、教授には敢然と立ち向かう。

鯉太郎の夢 (96 枚)

養鯉場で紅白の錦鯉として生まれた「鯉太郎」は、自分たちの将来が錦鯉としての美しさによって大きく異なることを知る。品評会で賞をとるような錦鯉になることを夢見た鯉太郎であったが、頭の赤色はしだいに薄くなり、他の美しい鯉に比べて見劣りするようになった。やがて、料亭に安く売られた鯉太郎は、少ない餌を食べるために、「親分」の配下となり、他の子分とともに、親分に尽くすようになった。多くの錦鯉たちは痩せて、意地汚なかった。このままこの池で一生を終えるのかと思った鯉太郎であったが、偶然、正平という孫へのプレゼントとして購入され、その家の狭い水槽で金魚と暮らすことになった。しかし、鯉太郎は正平やその母親に愛されていたわけではなく、金魚たちとも仲良くなれなかった。金魚に負けまいと餌を食べまくった鯉太郎は、やがて小さな水槽には大きくなりすぎた。邪魔者になった鯉太郎は近くの川へ棄てられた。あまりに違う環境の中で戸惑った鯉太郎であったが、しだいに自然の中で生き延びる術をおぼえ、他の黒鯉の産卵に突っ込んで放精することによって、自分の子を作ることになった。ブラックバスから子を守るために奮闘したり、橋から声援を送ってくれる子供たちに応えたりする鯉太郎は幸せだった。

ウミネコの矜持 (145 枚)

アウトドアスポーツに情熱をかけてきた私は、生活のために廃棄物処理場の臨時職員として働くことになった。山中という正規職員に怒鳴られながらも仕事に慣れていった私は、やがて同じ臨時職員の佐川がさぼることばかり考えていることに苛立つ。臨時職員の任期が終わりに近づいた年末の忘年会で、佐川は山中たちに激しく糾弾された。それを止めに入った私は、処理場の事務員として働いていた悠美と付き合っていることを非難され、山中たちと睨み合うことになった。外に出た私は、処理場の隅でゴミに火をつけようとしていた佐川を見つけ、突き飛ばして火事になるのを阻止した。

春になって無職になった私は他の臨時職員と何でも屋を始めるがうまくいかず、悠美との関係も気まずくなっていった。やがて、その会社を廃棄物処理場の OB である志村が、自分の子会社として引き取り、若い社員も入ってきた。新会社に馴染めない私に対して、事業本部長に就任した佐川は厳しく当たるようになった。何もかもうまくいかなかった私は、海辺に寝転んで、会社を辞めること、自分一人の道を模索することを決意した。